Vādanyāyaにおける反所證拒斥認識手段
——ダルマキールティによる存在性に基づく刹那滅論証——

佐々木亮

1. 問題の所在

インド思想史は討論の歴史だろうと言っても過言ではない。その淵源は古くはṛgvedaの「謎の歌」にまで遡ることができるとされ、さらにはウパニシャッド文献の神学的対論にも示されるように、紀元前1000年以上の昔からインドでは討論が活発であったことが窺われる。また、問答法の議論形式は、討論場での論争に限らず、経典や論書の基本スタイルでもあった。このような土壌のインドで討論術・討論規則が整備されたことは自然なことであり、とりわけニーヤーヤ学派はその体系化に積極的であった。ニーヤーヤ学派の思想体系は討論術・討論規則に関する多様な概念を内包しているが、そこで論じられる規則の中でも特に「敗北の条件」（nigrahasthāna）に焦点を当てて仏教側から批判的議論を展開したのが、ダルマキールティ（Dharmakīrti, ca. 600-660/ca. 550）の『ヴァーダ・ニーヤーヤ』（Vādanyāya, 以下 VN）である。

VNは「敗北の条件」に対して、ニーヤーヤ学派による従来の規定とは異なる独自の定義をとえており、その点で討論術・討論規則についての独創的な内容をもつ論書となっている。しかもその定義は彼の論理学的・哲学科的理念に裏打ちされたものであるため、VNでは討論術的問題に留まらず、その背景にある

（1）「敗北の条件」は討論の場において立論者と対論者がいかなる振舞いをすれば敗北したと見なされるかということについて定めた規則である。「敗北の条件」の内容は、『チャラカ・サンヒター』（Carakasamhitā）や『方便心論』での取り扱いを経て、ニーヤーヤ学派の根本聖典『ニーヤーヤ・ストラ』（Nyāyasūtra, ca. 1-4c.）で22種類の細目にまとめられたと考えられる。Cf. Kajiyama [1984], Kimura [2006].

その後も『ニーヤーヤ・ストラ』に対する註講書『ニーヤーヤ・バーシュヤ』（Nyāyabhāṣya, ca. 4c.）や、その復注解書『ニーヤーヤ・ヴァールッティカ』（Nyāyavārttika, ca. 6c.）において継続される過程で、「敗北の条件」は内容的に整序されていったと考えられる。

（1）
様々な論理学的・哲学者の問題が論述されることになるが、中でも、存在性という証明に基づく刹那滅論証（sattvānumāna）が VN において仔細に論じられていることは周知の通りである（2）。そして、ダルマキールテがこの存在性に基づく刹那滅論証の証明方法として考案したのが、「所論の反対に [証明が存在することを] 拒斥する認識手段」（sādhyaviparyaye bādhakapramaṇām，以下「反所論拒斥認識手段」と略記する）であった。

VN で詳論されるこの技巧的な証明方法に対して Steinkellner [1991] は精緻な分析を展開しており、またその同年にそれまでの VN 研究の集大成的成果として Much による VN の校定テキスト及び翻訳研究（Much [1991]）が出版されている。本論文はこれらの先行研究を踏まえた上で、ジャンタラクシタ（Śāntarakṣita，ca. 725–788）による VN への註解書 Vipaṅcitārtha（以下 VA）を活用しながら VN を解読することにより VN における刹那滅論証の内容分析を深化させることで、改めて VN における反所論拒斥認識手段の規定を抽出することを図るものである。

本論文の具体的な構成は以下の通りである。まず刹那滅論証が論じられる前提となる VN の文脈を確認する（第 2 節：「敗北の条件」の定義）。次に、刹那滅論証の分析を通じて反所論拒斥認識手段の働きを明らかにする（第 3 節：存在性に基づく刹那滅論証）。そして、前節までで判明した刹那滅論証の全体像を示しつつ、反所論拒斥認識手段によって証明されることと証明されないことの論理的境界を指摘することで、反所論拒斥認識手段に期待される論理的役割を明示する（第 4 節：反所論拒斥認識手段の問題と再評価）。以上の検討の帰結として、VN における反所論拒斥認識手段の内容を纏めることを最終的な目標とする。

2. 「敗北の条件」の定義

刹那滅論証の分析に入る前に、まず VN において刹那滅論証が論じられる前

（2）ダルマキールテにおける刹那滅論証の段階的発展については、Steinkellner [1968/1969] を参照。VN ではダルマキールテの論ずる刹那滅論証のうちでも、最も発展的な形態のものが扱われる。
提となる文脈を確認する。VN はその構成上、「敗北の条件」の一般的定義を与える総論部（前半部分，VN 1-25）と、ニヤーヤ学派の規定する二十二種類の「敗北の条件」の各項目を個別的に批判する各論部（後半部分，VN 25-68）とに大きく分けられる（3）。このうち前半の総論部は、ダルマキールティ独自の論理学的概念を用いて「敗北の条件」に新たな定義を与えるものとなっている。

(VN 1, 4-5:) asādhanāṅgavacanam adośodbhāvanaṁ dvayōḥ / nigrāhasthānam, anyat tu na yuktam iti nesya te //1//

asādhanāṅgavacana と adośodbhāvana(4)とは、両者（立論者と対論者）(5)にとっての、[即ち前者は立論者、後者は対論者にとっての]敗北の条件である。しかし、[この二つ]以外の[敗北の条件](6)は理に適っていないから認められない。

ダルマキールティはまず「敗北の条件」を、立論者の敗北の条件である asādhanāṅgavacana と、対論者の敗北の条件である adośodbhāvana の二種類に

(3) VN は、その前半部分で「敗北の条件」に対して二系統七種類の一般的定義を与え、その後半部分でニヤーヤ学派の規定する二十二種類の「敗北の条件」の具体的細目について批判的検討を行なっている。なお、ダルマキールティ自身は VN の前半部分と後半部分とを対照させる議論を展開してはいないが、両者に密接な内容の関連性があることは明らかである。「敗北の条件」に関する VN の前半部分と後半部分それぞれの内容分析、及び VN の前半部分と後半部分を対照させる包括的分析については、煩を改めて論じる様定である。

(4) "asādhanāṅgavacana" と "adośodbhāvana"には適切な譯語を與えが困難である。その理由として、合成語の分解の仕方が一通りではないこと（例えば分解の仕方が「asādhanā」と譯むべき場合と "avacana"と譯むべき場合とがある）と、合成語の単語の意味が解析の仕方に依って変えられること（例えば "āṅga"という語は「原因」という意味で使われる場合と「部分」という意味で使われる場合とが厳密に区別されている）が挙げられる。本論文では文脈上その意味を限定せられ る場合に限りこれらの語に対して適当な譯語を與え、意味の限定が難しい場合には原語をそのまま用いることとする。なお、この両語の分解と意味については、Muck [1991: Einleitung § 1] を参照。

(5) See VA 3, 6-5: asādhanāṅgavacanam adośodbhāvanan ca dvayor vādīpratīvadīnīr yathākramāṁ nigrahasthānam parājeyadhikaraṇām (asādhanāṅgavacana と adośodbhāvana は、両者にとっての [即ち、それぞれ] 順に、立論者と対論者にとっての敗北の条件 [即ち] 降伏の根據である).

(6) See VA 3, 6-8: anyat tv ity etaddvayaśrūyatikram akṣapādāparikalpitaṁ pratijñānamyāsādikāṁ vākyamāṇāṁ nigrahasthānam na yuktam iti kṛtvā nesya te. nigrahasthānam iti vartata

(*) etaddvaya- em. [P 23a8, D 5b4; gnyis po de dag las]: etaddhaya-.) (「しかし[この二つ]以外は」 というのは [以下のように意味である]。この二つ（asādhanāṅgavacana と adośodbhāvana）と区別され、アクシャパーダによって構想された、「主張命題の放棄」などからなる、[VN の後半部で] 説かれることになる敗北の条件は、理に適っていないとみなされるから認められない。[以上のように]「敗北の条件は」と補う。) Cf. Much [1991: 2, Anm. 10].

( 3 )
限定する。この両合成語はそれぞれ多様に語義解釈されるうる。その諸解釈のうち、本論文で取り扱うのは、asādhanaṅgavacanaの第一解釈の場合のみである。それは次のように示されている。

（VN 1, 6-8:）iṣṭasyārthasya siddhiḥ sādhanam, tasya nirvartakam āṅgam, tasyāvacanam tasyāṅgasyānuccāranam vādino nirgrahādhikaranam.

証明（7）（sādhana）とは[論証されるべきものとして]（8）意図された事柄の成立であり、要因（9）（āṅga）とはそれ（証明）を成り立たせるものである。それ（証明の要因）を表述しないこと、[即ち]その要因を明言しないことが（10），立論者にとっての敗北の根拠となる。

asādhanāṅgavacanaの第一番目の意味は、「証明の要因（sādhanāṅga）を表述しないこと（avacana）」である。ここで「証明の要因」は、具体的には、本質因、結果因、非認識因の三種類の要因に限られる（11）。ダルマキールティは、このような証明の要因を表述しないことの理由として、「[立論者が]それ（意図された証明されるべきこと）を認めたにもかかわらず，[証明の要因が]思い浮かばないことによって沈黙するから，または，証明の要因を確証しないから」（12）という場合を挙げている。ただし、この二つの根拠のうち、前者の「思い浮かば

（7）See VA 3, 10: tasya siddhiḥ pratipattiḥ sādhanam（sādhaṇaとは，それ（意図された事柄）の成立[即ち]認識である）。シャーンタラクシャはこの箇所のsādhaṇaを，証明の手段[karana]の意味でもなければ，証明行為の意味でもなく，証因を原因とする結果としての認識[pratipatti]の意味で解


（8）See VA 3, 9-10: iṣṭo 'rtha nityaḥ śabda ityādi sādhyaṃvarṇaṃ（意図された事柄である「音声は無常である」などが，論証されるべきものとして願われた[事柄である]）。

（9）See VA 3, 13-14: kāraṇaṃpyāyāyam atṛśāṅgaśabdo nāvayavaparyāya ity arthah（ここで，この「要因」という語は，「原因」の同義語であり，「部分」の同義語ではない，という意味で）Cf. Much [1991: 2, Anm. 12].


（11）See VN 1, 10-11: trividhām eva hi śīlaṃ apratīkṣaṇaṃ siddhē āṅgam, svabhāvaḥ kāryam anupalambhau ca（即ち，知覚されていないものが成立する要因は三種類の微表のものであり，[それ]）は本質[因]と結果[因]と非認識[因]である。

（12）VN 1, 8-9: tad abhyupagamyāpratibhyāṃ tuṣṇiṃbhāvāt, sādhanāṅgasyāsamarthanād vā.
ないこと」(apratibhā)（13）は22種類の「敗北の条件」の一つであり、その内容についてはVNの後半部で論じられるため、実際に直下の箇所に記載されるとの差は後者の論証の要因を確認しないことについてのものであることを断っておく。そして更に、「それ（論証の要因）の確証とは、[論証に対する]所証による関連を証明し、[かつ、論証が]基体にあることを証明することである」(14)と説明される。以上より、asādhanaṅgavacanaの第一解釈の内容は次のようにまとめられる。

● asādhanaṅgavacanaは立論者にとっての敗北の条件であり、その第一解釈は「論証の要因を表述しないこと」である。即ち、立論者が主張を証明する際に、本質因・結果因・非認識因の三種の証因のうちのいずれを用いる場合であっても、証因を確証（samartha）しないこと、即ち、主題所屬性（paksadharmatā）と関連関係（vyāpti）の両方を証明しないことが、asādhanaṅgavacanaの第一解釈である。

しかし、この定義からはまだ各証因の場合における「証因の確証」の内容が見えないうち。従って次の課題は、本質因・結果因・非認識因のそれぞれを確証するための具体的な方法を示すことであると言えよう。ダルマキールティはこれ以降、それぞれの証因の具体的な確証方法を明示することによって、立論者が敗北に陥る条件を具体化する議論を展開していく。

3. 存在性に基づく剎那滅論議

3.1. 剎那滅論議の第一論議

VNでは三種の証因のいずれについても確証方法が述べられているが、本論文はその中でも特に本質因(15)の場合のみに着目することにする。本質因を用

(13) シャーンタラクシタは「思い出ないことが」(apratibhā)を次のように説明する。VA 3.21-22: apratibhātra pūrvāḥdūtārthām vīṣmaṇaḥ stambhiyatvāc ca grhyate ('思い出ないことが')とは、この場合、以前に理解した内容を忘れることであり、また、直接してしまうことであると把握される。Cf. Much [1991: 3, Anm. 15].


(5)
した論証の一例としてダルマキールティによって提示されているのが刹那滅論
論である。本節では刹那滅論証の分析を通して、反所証拒斥認識手段の働きを
明らかにすることを目標とする。

まず、刹那滅論証における最も基本的な論証は、次のような形で示される。
(VN 1, 13–14; yathā yat sat kṛtakam vā, tat sarvam anityam, yathā ghaṭādih,
san kṛtako vā śabda iti.
例えば、何であれ存在するものないし作られたもの、その全ては無常なもの
である。壺などのように、音声は、存在するものないし作られたもので
ある [という以上の論式が本質因の場合の論証の一例である]。

VN の刹那滅論証の文脈に限って言えば、ダルマキールティは「存在するも
の」(sat) と「作られたもの」(kṛtaka) とを特に区別して用いておらず(16)。こ
れ以降の箇所で証因が言及される場合には「存在するもの」の方のみが取り上
げられるため、本稿も議論の簡略化のために今後は「作られたもの」の方は省
略して論じることにする。このような了解のもとで、刹那滅論証の最も基本
的な論証は以下のようにまとめられる。

【論証 1（刹那滅論証の構成部分 1）】（主題所属性：）音声は存在するもの
である。（遍充関係：）存在するものは無常なものである。（主張命題：）
音声は無常なものである。

この刹那滅論証における主題は「音聲」であり、用いられる証因は「存在性」
(sattva) という本質因であり、また、所証は「無常性」(anityatva) である(17).

(15) 本質因は次のように定義される。HB 5*: 10–11: ... sādhanadharmabhāvamātrānvyayinī sā-
dhyadharme svabāvo hetuḥ（……能證属性がただ単に存在することに随伴する所証属性に関して、
本質は論証因である）。端的に言えば、証因と所証とが実質的に同一である場合に、その証因は本質
因と呼ばれる。Cf. NB III 18。なお、ダルマキールティの本質因ないし「本質」概念をめぐる諸問題
照。

(16) 刹那滅論証における「存在性」と「所作性」をめぐる諸問題については、Sakai [2009a: 73, fn.
34], [2009b], [2010a] 等を参照。

(17) 基體 (dharmin) は属性 (dharma) をもつものであり、証因 (hetu) や所証 (sādhyā) は基體の
もつ属性であるという理解を原則として、本文中の表現を適宜言い換えることになる。例えば、テ
キストに現れる「存在するもの」(sat) という概念を本論文内訳証因として明示する場合には、「存
在性」ないし「存在すること」(sattva) のように抽象化して表記する。
従って、刹那滅論証の場合の本質因の確証とは、「音声は存在するものである」という主題所屬性と、「存在するものは無常なものである」という遍充関係を証明することであると言える。ただし、VN では「音声は存在するものである」という主題所屬性の証明方法については論じていないため、本論文は VN の内容に則して「存在するものは無常なものである」という遍充関係がいかにして証明されるのかという問題のみを取り扱うことにする。

3. 2. 刹那滅論証の第二論証

さて、【論証 1】の遍充関係を証明する方法は次のように説明される。

(VN 2, 1-5:) atra vyāptisādhanaṃ viparyaye bādhakapramāṇopadarśanam.
yadi na sarvāṃ sat kṛtakaṃ vā pratikṣānavaṃī syāt, aksaṇikaśya kramaśaṃ-
padyābhyaṃ arthakriyāyogān arthakriyāsāmarthalyālakaṃ nivṛttam ity asad
eva syāt. sarvāsāmarthapākhyaśvālavahalakaṃ hi nirupākhyām iti.

この場合（本質因の場合）(18), 遍充関係の証明とは、[所証の]反對(19)に
[證因が存在することを] (20)拒斥する認識手段を提示することである。[例えば]もし, あらゆる存在するものないしう作られたものが各瞬間に滅する

(18) See VA 6, 25: atreti svabhāvahetau ([「この場合に」とは、本質因の場合に、ということである。]
(19) 「所証の反對」(反所証, sādhyaviparyaya) は、「異類例」(vipakṣa) の類義語であると考えられ
る。Cf. HBT 44, 4: sādhyasya viparyayo vipakṣaḥ tatra. ただし、この場合の反所証は単なる異類例で
はなく、「所証と矛盾する属性をもつもの」という意味で限定された異類例のことであると理解され
ねばならない。Cf. Steinkellner [1991: 316-318].

本稿第3節で検討する内容の先取となるが、反所証拒斥認識手段によって直接的に証明される
のは本質因の場合の偏充関係と對偶の関係にある事柄である。即ち、本質因の場合の偏充関係が肯
定的随伴関係（anvaya）ならば、反所証拒斥認識手段によって証明されるのはそれと論理的同値な
否定的随伴関係（vyatireka）である。両者の間の論理的同値性を保持するためには、反所証は「所証
と矛盾する属性をもつもの」として理解されねばならない。これに反して、例えば、本質因の場合
の偏充関係における所証として「暖かさ」という属性が用いられた場合に、反所証を「冷たいもの」
（「暖かさ」という属性に対して立てるが矛盾しているわけではない「冷たさ」という属性をもつもの）
として立てるような論式を想定すると、反所証拒斥認識手段によって証明される事柄が本質因の場合
の遍充関係との論理的同値性を欠くことになり、結果として、反所証拒斥認識手段は本質因の場合
の遍充関係を証明できないことになってしまう。

(20) See VA 6, 26-27: viparyaye sādhyasya hetor vartamāṇasasya sata iti śeṣāḥ (所証の反對に現存する
[即ち]存在する證因を、と補足される)。Cf. DhPfr 95, 20-21: sati caivaṃ sādhyaviparyaye hetusattā-
bādhakapramāṇadarsanam api ... (またそうであるならば、反所証において證因が存在することを拒
斥する認識手段を示すことにも……).
ものであるわけではないとすれば、瞬間的でないものは、繊細的とも即時的とも効果的作用が不可能であるから、效果的的作用の能力があることを特徴とする [存在性] (21) を欠く故に (22)、存在しないはずであろう。このような能力も語られることのないこと（upākhyāviraha）を特徴とするものは、存在しないもの（nirupākhyā）だからである (23)。

ダルマキールティは、本質因の遍充関係の説明とは、反所証拒斥認識手段 ([sādhya]viparyaye bādhakapramāṇam) を提示することであると言う。第２節の議論を踏まえて言えば、立論者が本質因を用いて主張命題を説明するに当たって敗北に至ることを回避するためには、反所証拒斥認識手段を提示することで本質因の遍充関係を説明しなければならないということである。このような「敗北の条件」の文脈に鑑みれば、ダルマキールティが本質因一般の確証方法を論じていることは明らかであるため、反所証拒斥認識手段は少なくとも VN においては全ての本質因の遍充関係の説明のために用いるべき方法として構想されていたと言える (24)。

さて、それではこの反所証拒斥認識手段とはいかなる働きを為すものなのかだろうか、その働きは以下で検討していく【論證 1】の遍充関係の説明という具體例を通じて確認されるであろう。

まず、説明したい事柄は、「存在するものは無常なものである」という遍充関

(21) See VA 7, 26–27: arthakriyāyāḥ sāmarthyaṁ tad eva laksanam, yasya sattvasyeti vigrahāḥ (効果的作用的の能力があること、それが即ち特徴であって、存在性が [その特徴] をもつ、と分解される)。

(22) See VA 8, 7: itiśrutir*1 hetau, tasmādarthe vā (*1 śrutir em. [P 28a7, D 56b6: phyir zhes bya ba ni gnatan tshigs kyi sgra ste (D; te P): suter. ]('iti」という語は、理由ないし「従って」という意味である)

(23) シャーンクラクサミによれば、いかなる能力も何らかの言葉によって表現されるということがこの箇所の前提となっている。VA 8, 8–9: sarveśaṁ sāmarthyaṁ śūnyāṁ upākhyā upākhyāyate anayeti kṛtvā tasyā virahā bhāvah (あらゆる能力には、名稱 [即ち] 語がある、 [能力は] これは名稱) によって語られるのだと考えた上で、それ (名稱) が欠如している [即ち] 存在しないのである。

仏教であることを改めて確認しておく。尚ここでは、「無常であるもの」（anitya）と交換可能な概念として、「各瞬間に滅するもの」（pratikṣaṇaviniścaya）や「瞬間的なもの」（kṣaṇika）が用いられていることに注意すべきである。さて今、反所証である「瞬間的でないもの」（常住的なもの）や「各瞬間に滅しないもの」と換言可能である）があると仮に想定する（25）。この瞬間的でないものは、「継続的にも即時的にも効果的が否応ないことを」という属性をもつと言える。つまり常住なものには、剣利那経が後であろうと一剣利那後であろうと、効果的作用を為しえない（26）。そして、「継続的にも即時的にも効果的が否応ないことを」という属性は、「効果的作用のが否応ないことを」という属性によって満足されることになると考えられる。その論理の根拠は次項3.3で検討する。
さらに、ダルマキールティの定義に従えば、「存在性」概念は「効果的作用の能力があること」で置き換えられるため、効果的作用の能力がないものは存在しないものだということになる（27）。

以上の論証より、「瞬間的でないものは存在しないものである」という結論が

(25) シャーンサラクサに基づけば、この反所証である「瞬間的でないもの」は、「瞬間的でないこと」（kṣaṇīka）のような属性とは区別されるもの（padārtha）であり、また、あくまで仮にその存在性が認められたもの（abhuyapaga）に過ぎないことが分かる。Cf. VA 10, 8（本文文の註32を参照）。


(26) Katsura [1983: 100-101] が指摘しているように、ダルマキールティは「瞬間的でないものは継時的にも即時的にも効果的である」という主題によって、因果間関を「継続的に効果的作用が可能であること」ないし「即時に効果的作用が可能であること」の二種類のモデルで想定していたと考えられる。Cf. HB 17*1, 1-4。

また、Akamatsu [1984: 207-209], Yoshimizu [1999: 197] は「瞬間的でないものは継時的にも即時的にも効果的である」という主題に対するダルマキールティの Pramāṇaviniścaya における説明を検討している。その内容を略説すれば、常住なるものは変化しないものであり、変化しないのが原因となって継時的であると即時的であると結果を生みだすという想定は不合理な事態に陥るので、常住なるものは継時的にも即時的にも効果的作用を為しえないということである。Cf. PVIn II 80, 1-5, PVIn II 67, 6-9。

(9)
導出されることになる。この遍充関係は、【論証 1】の遍充関係である「存在するものは無常なものである」という肯定的随伴関係（anvaya）と對偶の関係にある否定的随伴関係（vyatireka）に相当すると言える(28)。従って、この説明によって実質的に【論証 1】の遍充関係が説明されたことになるわけである。これが、VN における「存在するものは無常である」という遍充関係の説明である。この論証は次のように簡潔にまとめられる。

【論証 2（刹那滅論証の構成部分 2）】（主題所属性：）瞬間的でないものは繰時的にも即時的にも効果的作用が不可能なものである。（遍充関係：）繰時的にも即時的にも効果的作用が不可能ものは効果的作用の能力がないものである。（定義：）効果的作用の能力がないものは存在しないものである。（主張命題：）瞬間的でないものは存在しないものである。

反所証拒絶認識手段の働きは、この【論証 2】において如実に示されていると言えるであろう。即ち刹那滅論証に則して説明すれば、反所証拒絶認識手段は、「無常性」という所証に対して、それと反対の「非瞬間性」（常住性）という属性をもつものである「瞬間的でないもの」（常住なもの）の存在を假定した上で、その「瞬間的でないもの」という反所証において「存在性」という属性があることを否定する働きを果しているのである。以上が反所証拒絶認識手段の基本的な働きである。しかし、何故このような働きを果すものに対してあって「認識手段」（pramāṇa）という名称が用いられるのかということについては現時点ではまだ明らかになっていない。次項 3. 3 ではこの点を踏まえて、さらに反所証拒絶認識手段の内容分析を進めることにしよう。

以上のように【論証 1】の遍充関係を説明する方法が明らかにされたが、しかし、【論証 1】の遍充関係が【論証 2】によって説明される必要があったよう

第29号


(28) ダルマキールティの論理学体系における肯定的随伴関係（anvaya）と否定的随伴関係（vyatireka）の間の関係性については、Katsura [1986], Uno [1988] 等を参照。
「Vādanyāya における反所誓拒斥認識手段（佐々木）

に、同じく【論證 2】の遍充関係もまた別の論證によって証明されねばならないのではないだろうか。そして、【論證 2】の遍充関係を証明する別の論證は更に別の論證によって証明されねばならないのではないか。ダルマキールティは、反所誓拒斥認識手段による証明がこのような無限後退に陥るという反論を想定した上で、その過失は回避可能であると答えている(29)。それでは、【論證 2】の遍充関係とは別の遍充関係を新たに持ち出すことなく、いかにして【論證 2】の遍充関係を証明することができるのであろうか。この問題に対するダルマキールティの回答を次項で確認していくことにする。

3. 3. 剃那滅論証の第三論証

【論證 2】の遍充関係は、「継時的にも即時的にも效果的作用が不可能なものである」いうことであった。ダルマキールティは以下の箇所で、この遍充関係が新たに別の遍充関係を持ち出すことなく証明可能であるということを説明している。

(VN 3, 9-13:) tatra sāmarthyaṁ kramākramayogena vyāptaṁ siddham, prakārāntarābhāvat. tena vyāpakadharmanupaladbhir ākṣaṇike sāmarthyaṁ bādhata iti kramayaugapyāyogasya sāmarthyābhāvena vyāptisiddher nānavasthāprasāṅgah.

そこで（上述の議論）(30)では、【效果的作用の】能力のあることが継時的または非継時的（即時的）に【效果的作用が】可能であることによって遍充されるということが既に成立している。何故ならば【継時的または非継時的

(29) See VN 2, 19–3, 3: atrāpy adarśanam apramāṇayataḥ kramayaugapyāyogasyaivāsāmarthyena vyāptisyadhe pūrvakasyāpi hetor avyāptih, ihāpi punaḥ sādhanaṇakrama 'navasthāprasāṅgah iti cet. na ((「反論：」「元の論証因のみならず」上述の場合（反所証において証明因を拒否する論証を提示する場合）にも、【あなたのように】無知覚を【拒斥】根拠であると認めない者にとっては、継時的にも即時的にも【效果的作用が】不可能なことに対する【效果的作用の】能力がないことによる過失が成立しないので、【存在性ないし所作性という】先の論証因にも【剃那滅性（無常性）という所証による】遍充は【成立】しない。この場合にも更に証明を企てるならば、無限後退に陥ると反論するならば【次のように答える】、（答論：）【無限後退には陥らない】。

(30) See VA 9, 23–24.: tatrasabdo vākyopanyāsārthah 「そこで」という語は、【前の】文を述べることを意味する。

(11)
に效果的作が可能であること] 以外の種類 [の效果的作が可能であること] は存在しないからである。それにより（效果的作の能力のあることが扉時的または非扉時的に可能であることによって遍充されることにより），能遍たる屬性（扉時的または非扉時的に效果的作が可能であると）の非認識は，瞬間的でないものにおいて［效果的作の］能力があることを拒斥するのである。従って，扉時的にも扉時的にも [效果的作が] 不可能であることを，［效果的作の］能力がないことによって遍充することが立証されるため，無限後退には陥らないのである。

以上の内容は次のように説明できる。我々は【論証 2】において「扉時的にも扉時的にも效果的作が不可能であること」いう概念が用いられていることを確認した。この概念を否定した対立的概念は「扉時的または扉時的に效果的作が可能であること」である。ここで，「扉時的に效果的作が可能であること」と「扉時的（非扉時的）に效果的作が可能であること」という屬性は互いに排除し合う関係にあるので，この両属性は「效果的作が可能であること」という領域の全體を占めると考えられる。つまり，扉時的に效果的作が可能なものと，扉時的に效果的作が可能なもの以外には，效果的作が可能なものには存在しないということである。従って，「效果的作が可能であるこ

(31) See VA 9, 26-10, 3: prakārāntarāsaṃbhavāt, yasmād anyat kramākramayaṭiriktaṃ prakārāntaram nāsti, tasmād yatredaṃ sattvalaṅkaṇam arthakriyāsāmarthyam, tatrāvaṣyam ca kramākramābhāyām arthakriyāyā bhavītavyam. nanu ca kramākramābhāyām anyo rāśir nāṣīty etad eva kathāṃ siddham. kramākramayor anyonyapariharasthitālakṣaṇatvam ca triyapraṇārayatekvat, bhavābhāvavat iti brūmah (「他の種類はないから」，「つまり，他のもの [即ち] 経時性と即時性以外の他の種類は存在しないからである，従って，存在性の特徴であるこの效果的作の能力があるところには，また必ず経時的または即時的に效果的作があらねばならない。（反論）経時性と即時性の両者以外の分類はないというままでにこのことが，何故成り立つか，（反論）経時性と即時性の両者，互いに排除し合っていることを特徴とするために，第三の種類が排除されるからである，存在と非存在が [互いに排除し合っていることを特徴とするために，第三の種類が排除される] ようにである，以上のようには我々は述べる。） Cf. Moriyama [2011: 34].

(32) See VA 10, 6-8: tena sāmarthyasya kramākramayogena vyāptatvena vyāpakasya dharmasya kramākramayogasyānupalabdhiḥ, aksāṇike padārthe bhupagate sāmarthyaṃ bādhate nīrākarotīty arthah（それにより [即ち，效果的作の] 能力が扉時的または非扉時的に可能であることによって遍充されることにより，能遍たる屬性としての扉時的または非扉時的に可能であることの非認識は，瞬間的でないものという [仮に] 認められたものにおいて，能力があることを拒斥する [即ち] 否定する，という意味である）。
Vādanyāyaにおける反所証拒斥認識手段（佐々木）

と」という属性は「緒時のまたは即時的に効果的作作用が可能であること」という属性によって遍充されるという関係が成り立つと言える。他方で、ダルマキールティにとって、「効果的作作用の能力があること」（arthakriyāsāmarthya）と「効果的作作用が可能であること」（arthakriyāyoga）とは実質的に同じ概念であると言える（33）。以上より、「効果的作作用の能力があること」という属性は「緒時のまたは即時的に効果的作作用が可能であること」という属性によって遍充されることになるのである。

この論証全體が依従する論理的実体であるところの「第三領域の否定は、相互排他的概念の使用に基づくものであり、その相互排他的性が認められる限りにおいて極めて自明に成り立つ事柄であるため、それ以上の証明が不要であると考えられる。また、「効果的作作用の能力があること」と「効果的作作用が可能であること」の両概念が交換可能であることも、少なくともダルマキールティ自身は自明な事柄であると考えていると言えよう。従って、【論証 2】の遍充関係は、別の新たな遍充関係を持ち出すことなく証明することができるため、無限後退には陥らないと言えるのである。

以上の論証を次のように簡潔にまとめよう（34）。

【論証 3（剣那滅論証の構成部分 3）】（第三領域の否定：）効果的作作用が可

(33) 厳密に言えば、「他の種類はないから」（prakārīntarabhāvat）という第三領域の否定によって、直接的に「効果的作作用の能力があることが、緒時のまたは即時的に効果的作作用が可能であることをによって遍充される」ということが成立するとは言えない。第三領域の否定によって成り立つのは、「効果的作作用が可能であることが、緒時的または即時的に効果的作作用が可能であることによって遍充される」ということではない。VN の説明を整合化するならば、ダルマキールティは「効果的作作用の能力があることが、緒時的または即時的に効果的作作用が可能であることによって遍充される」ということを成立させるに当たり、第三領域の否定以外の論理的根拠として、「効果的作作用の能力があること」と「効果的作作用が可能であること」の両者を交換可能な概念であるということを暗黙の前提としていると理解せねばならない。

本稿の脚註 27 における VN 9, 12 と HB 3o, 14 の「存在性」ないし「実在するもの」の定義を比較参照すれば、ダルマキールティが「効果的作作用の能力があること」と「効果的作作用が可能であること」の両者を共に「存在性」の定義に採用していることは明らかである。このことは、ダルマキールティが「効果的作作用の能力があること」と「効果的作作用が可能であること」の両者を交換可能な概念とみなしていたことの間接的な証拠とみなせる。

(34) 【論証 3】は【論証 1】や【論証 2】のように主題所属性と遍充関係からなるフォーマルな論証ではないが、【論証 2】の遍充関係の對偶を証明する議論であることは明らかであるため、一種の論証と見なすよう。
東洋の思想と宗教 第二十九話

能なものの範囲では、縁時的または即時的に果効的作用が可能なもの以外の種類のものはない。従って、果効的作用が可能なものは縁時的または即時的に果効的作用が可能なものである。（定義：）他方で、果効的作用の能力があるものは、果効的作用が可能なものである。（遍充関係：）以上より、果効的作用の能力があるものは、縁時的または即時的に果効的作用が可能なものである。

【論證 3】の遍充関係（肯定的随伴関係）の成立によって、その対偶に相当する【論證 2】の遍充関係（否定的随伴関係）はほぼ自明に成り立つことになるが、この【論證 3】から【論證 2】への繋がり方を、反所論拒斥認識手段の働きという観点から改めて確認し直すとしよう。

まず、【論証 3】の遍充関係の能遍（vyāpaka）は「縁時的または即時的に果効的作用が可能であること」という属性であるため、この能遍の非認識（vyāpākānupalabdhi）は「縁時的にも即時的にも果効的作用が不可能であること」である。【論證 2】はこの能遍の非認識を證因とするものであり、能遍の非認識は【論證 2】において、【論証 1】の「存在性」という本質因と立しない属性である「非存在性」（ないし「非存在性」の特徴である「果効的作用の能力がないこと」）を、「瞬間的でないもの」という反所論に対して設定する（pratyupasthāpana）働きを為す。【論証 3】の「非存在性」と「非存在性」とは互いに排除し合う属性であるために、「瞬間的でないもの」という同一のものに同時に所屬すること

（35）「能遍の非認識」は非認識因の一種である。P をもつものは Q をもつものである（ただし P, Q は任意の属性とする）という遍充関係を想定した上で、能遍 Q の矛盾概念である non-Q を証因として、所遍（証因 P の矛盾概念である non-P を証明する（つまり「non-Q をもつものは non-P をもつものである」という遍充関係を証明する）場合、その証因 non-Q のことを能遍の非認識という。Nyāyabindu では能遍の非認識を用いた論論例として、能遍の非認識「木が存在しないこと」に基づいて、「シンシャーバー樹が存在しない」ということを証明する論論を挙げている。NB II, 33: vyāpākānupalabdhir yathā — nātra śīṃsāpā, vrksābhāvād iti (能遍の非認識とは、例えば、「ここにはシンシャーバー樹は存在しない、木が存在しないから」というものである)。なおダルマキールティは VN において、能遍の非認識と「単なる非知覚」（adarśanamātra）の區別について言及している。Cf. Much [1991: 5, Anm. 24, 26].

（36）See VN 3, 3-6: yad adarśanam viparyayam sādhayati hetoh sādhayaviparyaye, tad asya viruddhapratyupasthāpanād bādhakam prāmāṇam ucyate（反所論において証論因の反對を成立させる無知覚は、【証論因に】矛盾したものを【反所論に】に対して設定するので、これ（証論因）を拒斥する認識手段であると言われる）。
Vādanyāyaにおける反所論拒斥認識手段（佐々木）

はできない。それ故に、一度「瞬間的でないもの」に対して「非存在性」が設定されれば、「瞬間的でないもの」に「存在性」という属性があることは自動的に否定されることになる。従って、「継続的にも即時的にも効果的作用が不可能なものは効果的作用の能力がないもの（存在しないもの）である」という【論譜2】の遍充関係が成り立つことになる。以上の分析から、VNにおける反所論拒斥認識手段の全貌が明らかにされたと言えよう。その内容は次のようにまとめることができる。

反所論拒斥認識手段（śādhyaviparyaye bādhakapramāṇam）とは、任意の本質因と所論との間の遍充関係を証明するために、その本質因と両立しない属性を反所論（所論と矛盾する属性をもつもの）に対して設定すること（pratyupasthāpana）で、反所論に本質因が存在することを拒斥する（37），能遍の非認識（vyāpakānupalabdhi）という証因である（38）。

また、非認識因（anupalabdhihetu）が反所論拒斥認識手段に他ならないというこのような理解に従えば、反所論拒斥認識手段とは「推論」（anumāna）の一種であり、そのことを示すために「認識手段」（pramāṇa）という呼称が用いられたのだろうということが分かるであろう（39）。以上で、本質因の遍充関係を証明する手段としての反所論拒斥認識手段の内容が明確になった。

（37）シャーンタラクシタは「反所論において証因を拒斥するもの」を二様に解説している。一つは、「拒斥するもの」を能遍の非認識因という「認識手段」（pramāṇa）とする理解であり、もう一つは、「拒斥するもの」を「証因と両立しないもの」（hetuviruddha）とする理解である。この両理解の差違は、反所論に対して証因と両立しないものを設定するもの（pratyupasthāpaka）を拒斥の原因とする証因と見なすか、証因と両立しないものという反所論に対して設定されたもの（pratyupasthāpita）を拒斥の原因と見なすかという視点の違いに基づくものであると理解できる。VA 11, 26–27: bādhakagrhegna-nātra viruddhasyā pratyupasthāpakaṃ pramāṇaṃ gṛhyate. bādhakagrhegna-pratyupasthāpitaṃ va hetuviruddham（ここでは、「拒斥するもの」という語によって、[証因と]両立しないものを[反所論において]に対して設定する認識手段が把握される。あるいは、拒斥認識手段によって[反所論に対して]設定される。証因と両立しないものが[把握される]）。

（38）VNでは「能遍の非認識」以外に反所論拒斥認識手段の候補は挙げられていない。しかし、Sakai [2010a], [2011]に詳説されるように、後代の説明者の解釈に基づけば、反所論拒斥認識手段を「能遍の非認識」という非認識因に限定する必要はないということには注意すべきである。例えば、「所作性論譜」（kṛtakatvānumāna）は、「否定されるべきものそれ自体と両立不可能なもの、認識」（svabhiavaviruddhupalabdhi）等を反所論拒斥認識手段とする論譜として解釈される。
4. 反所証拒斥認識手段の問題と再評価

前節までの分析により、剎那滅論譛を構成する各証の内容が明らかになった。ここで改めて各証をまとめて記載することで、VNで示される限りでの存在性に基づく剎那滅論譛の全體像を以下に示そう。

≪存在性に基づく剎那滅論譛≫

【論譛1】（主題所属性：）音声は存在するものである。（遍充関係：）存在するものは無常なものである。（主張命題：）音声は無常なものである。

【論譛2】（主題所属性：）瞬間的でないものは継時的にも即時的にも効果的作作用が不可能なものである。（遍充関係：）継時的にも即時的にも効果的作作用が不可能なものは効果的作作用の能力がないものである。（定義：）効果的作作用の能力がないものは存在しないものである。（主張命題：）瞬間的でないものは存在しないものである。

【論譛3】（第三領域の否定：）効果的作作用が可能なものの範囲では、継時的または即時的に効果的作作用が可能なもの以外の種類のものはない。従って、効果的作作用が可能なものは継時的または即時的に効果的作作用が可能なものである。（定義：）他方で、効果的作作用の能力があるものは、効果的作作用が可能なものである。（遍充関係：）以上より、効果的作作用の能力があるものは、継時的または即時的に効果的作作用が可能なものである。

ここで示された全體像から明白なように、反所証拒斥認識手段に基づく論譛は三重の論理的構造を有している。即ち、【論譛1】では最も基本となる「存在性」という本質因の遍充関係が提起され、【論譛2】では【論譛1】の遍充関係

(39) Tani [2003: 97-98] は、剎那滅論譛における能遍の非認識は「瞬間的でないもの」という「知覚不可可能なもの」（adrśya）に関する非認識であるため、「知覚不可能なの非認識」（adrśyānu-palabdhi）という独立の新たな認識根拠であり、ダルマキールティはそのことを明示するために「反所証拒斥認識根拠」という名称を付けたという趣旨の見解を述べている。しかし、ダルマキールティが一般に非認識因の文脈で論じる「知覚可能なもの」、即ち「認識のための絵を満たしたもの」（upalabdhiśaṇapārtapi）とは認識されない常識のものであることであって、論式の主張となるもののことではない（例えばNB III 23, NB III 35の論式を参照）。剎那滅論譛の場合で言えば「継時的または即時的に効果的作作用が可能であること」という属性が認識されない常のものである。ただし、この属性が認識のための絵を満たしているか否かという問題については慎重な検討が必要であろう。
Vādanyāya における反所論拒斥認識手段（佐々木）

を説明するために反所論拒斥認識手段を証因とする遍充関係が提起され、【論
證 3】では【論證 2】の遍充関係が無限後退に陥ることなく成立する根拠が示さ
れているのである。ただしこの刹那滅論証の全體像は VN の情報のみから
構成したものであって、十全な論証になってしまことには注意せねばならな
い。刹那滅論証の完全な論証図を構成するためには、【論證 1】の主題所属性,
【論證 2】の主題所属性と定義、【論證 3】の定義のそれぞれを説明せねばならな
い(40)。以上の事実は、反所論拒斥認識手段によって何が証明され、何が証明さ
れないかを如実に示すものであると言えよう。この点に関て次のことが指摘
可能である。

第一に、反所論拒斥認識手段は、本質因の場合の遍充関係の証明方法として
示されたものであって、本質因の場合の主題所属性の証明方法として掲げられ
たものではない(41)。従って反所論拒斥認識手段によって構成された上記の
論証では、【論證 1】の主題所属性の証明は為されていないのである。このこと
は、刹那滅論証の証明という点から見て片手落ちであるが(42)、敗北の條件の定
義としても不徹底であると非難される恐れがある。確かに、反所論拒斥認識手
段の規定によって本質因の遍充関係を証明する方法が挙げられることで「本質
因の遍充関係を証明しないこと」の内容は明白となったが、主題所属性の証明
方法は挙げられていないため、「本質因の主題所属性を証明しない」ということ
の内容は明らかではない。ただし、結果因の確認 (VN 3-4) と非認識因の確認
(VN 4-17) のいずれの場合にも遍充関係の証明方法のみが示されており、主題
所属性の証明方法が示されていないということからも、遍充関係の証明方法が
各証因ごとに規定されるべきであるのに対して、主題所属性の証明方法はそれ
とは異なる仕方で論じられるべきだとダルマキールティが考えていた可能性が

(40) それら各証明の詳細は VN では示されていないが、他のダルマキールティの著作及び諸注釈
もの著作から構成されると推察される。例えば、【論證 2】の主題所属性の証明は PVin II 80, 1-5,
PVin II 67, 6-9 で示されている。本論文の注 26 を参照。
(41) Cf. VN 2, 1-2. 本文論文中の譯を参照。
(42) 刹那滅論証における主題所属性、及び主題所属性という条件が満たされない場合の不成立
(asiddha) という論理的譯読をめぐる諸問題に関しては、ジュニアーナシュリーミトラ
(Jīnāśrīmitra, ca. 980-1030) の Kṣaṇabhāṅgādhyāya に詳細な議論が見られる。この問題について
は、Kyuma [2006] を参照。
あることは示唆されよう。

第二に、反所証拒斥認識手段それ自体は、反所証と反所証拒斥認識手段たる証因（存在性に基づく刹那滅論証の場合は能遍の非認識）に関する主題所屬性や、論理的前提として用いた諸々の概念規定を説明するわけではない。刹那滅論証においても、【論証 3】で説明されていることは【論証 2】の遍充関係のみであって、【論証 2】の主題所屬性の妥当性や【論証 2】の定義の正当性については、反所証拒斥認識手段によって保証されていないことが分かるであろう。このことを敷衍して説明すれば、反所証拒斥認識手段は結論のところ、「存在するものは無常なものである」という遍充関係における「存在性」と「無常性」の間の論理的な懸隔を、「存在性」と「效果的有用の能力があること」の間の論理的懸隔や、「無常性」と「継続的または即時的に效果的有用が可能であること」の間の論理的懸隔に移し置いたに過ぎないのだと理解できる。そして当然、このような反所証拒斥認識手段によって残置された論理的懸隔に付け入る対論者がいると考えられる(43)。しかし以上の分析結果に関して見方を変えれば、反所証拒斥認識手段によって、「存在するものは無常なものである」という教義的・哲學的に重要な問題が、「瞬間的でないものは継続的にも即時的にも效果的有用が不可能なものである」という因果関係の規定や、「效果的有用の能力がないものは存在しないものである」という存在概念の定義といった、より基本的な問題に還元されたのだと理解することも可能であろう。このような評価視点をとることで、反所証拒斥認識手段に対する新たな価値付けを為すこともできるはずである。

5. 結論

本論文は、ダルマキールティの VN における「敗北の条件」の部分的分析、及び刹那滅論証の分析を行った。そして、その分析結果として反所証拒斥認識手段によって説明できる事柄と説明できない事柄の論理的境界を明らかにし

(43) 一例として、Sakai [2010b] が検討しているように、ダルモーッタラ (Dharmottara, ca. 740-800) の Kṣaṇabhāṅgasiddhi には、「瞬間的でないものは継続的にも即時的にも效果的有用が不可能なものである」という【論証 2】の主題所屬性に対して、反証を提示する対論者が登場する。
た。以上の考察より、VNで示される限りでの反所証拒斥認識手段に関して次の事実が明らかになった。
1. 反所証拒斥認識手段は、本質因の確認の必要条件である。単に、反所証拒斥認識手段は、任意の本質因の場合の遍充関係を証明するための方法である。（本論文の第2節・第3節より）
2. 反所証拒斥認識手段は、本質因の確認の十分条件ではない。単に、反所証拒斥認識手段は、本質因の場合の主題所属性の証明方法ではないし、付言すれば論証中に用いられる概念規定の正當化方法にもなっていない。（本論文の第2節・第3節・第4節より）
3. 反所証拒斥認識手段とは、本質因と両立しない属性を反所証（所証と矛盾する属性をもつもの）に対して設定することによって、反所証において本質因を拒斥する働きを示す推論である。存在性に基づく剆那滅論証の場合には「能遍の非認識」という証因が反所証拒斥認識手段とされる。（本論文の第3節より）
4. 反所証拒斥認識手段による論証は、三重の論理的構造をもつ。単に、基本となる【論証1】、論証1の遍充関係を証明する【論証2】、論証2の遍充関係が無限後退に陥ることなく成立するということを示す【論証3】という、三段階からなる論証が構成されることになる。（本論文の第3節・第4節より）

引用・参考文献
【一次資料】
D sDe dge Tibetan Tripitaka, Bstan hgyur — preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo, eds. J. Takasaki, Z. Yamaguchi, Y. Ejima, Tokyo, 1977–1989.
HBṬ Hetinduṭikā of Arcaṭa, eds. S. Sanghavi, Muni Shri Jinavijayaji, Baroda, 1949.

(19)
東洋の思想と宗教 第二十九号


【二次資料】
Akamatsu, Akihiko (赤松 明彦)

Dunne, John D.

Funayama, Toru (船山 徹)

Gokhale, Pradeep P.

Iwata, Takashi (岩田 孝)

Kajiyama, Yuichi (梶山 雄一)

Katsura, Shoryu (桂 載隆)

Kimura, Toshihiko (木村 俊彦)

Kyuma, Taiken (久間 泰賢)
[2006] 「剎耶滅論証における主題所属性（pākṣadharmatā）をめぐる一考察 ——
Vādanyāya における反所證拒斥認識手段（佐々木）

Jñānaśrīmitra による主題（pakṣa）と論證因（hetu）の二種の解釈」，『三重大学人文科学部哲学科•思想学系論集』，pp. 87-98.

Mikogami, Esho（神子上 恵生）


Mimaki, Katsumi（御牧 克己）


Moriyama, Seiitetsu（森山 清徹）


Much, Michael Torsten


Nagatomi, Masatoshi（永富 正俊）


Sakai, Masamichi（酒井 眞道）


Steinkellner, Ernst


東洋の思想と宗教 第二十九號

Dharmakīrti Conference, pp. 311-324, Wien.

Tani, Tadashi（谷 貞志）
[2000] 『刹那滅の研究』. 東京.
[2003] 「「刹那滅論証」と「直観主義論理」」, 『印度學佛教學研究』 52-1, pp. 96-100.

Uno, Atsushi（宇野 悠）

Yoshimizu, Chizuko（吉水 千鶴子）

＜キーワード＞Vādanyāya, ダルマキールティ, 反所証拒斥認識手段, 刹那滅論証, 敗北の條件

付記 本稿は, 平成 23 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（22）